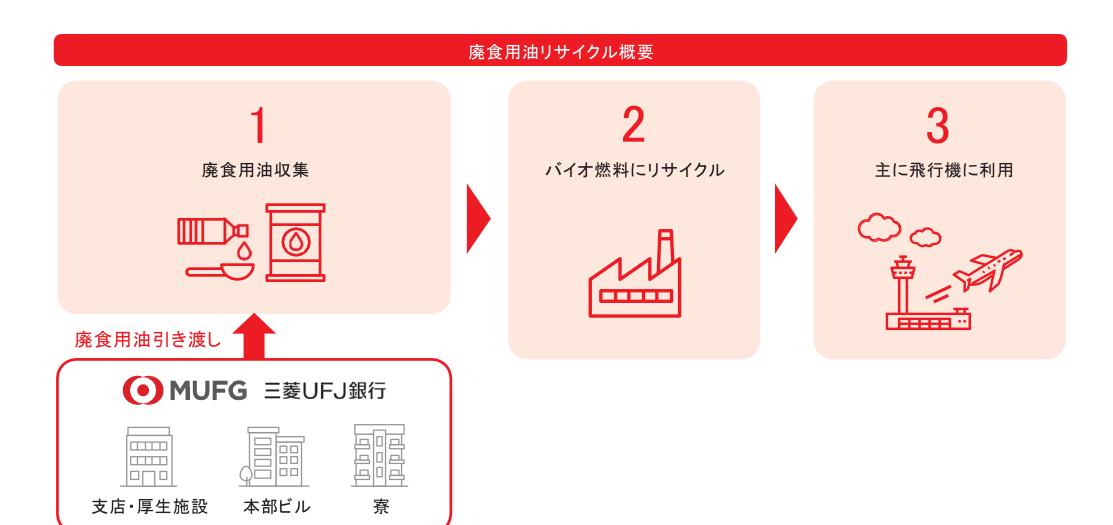
MUFGは、全国239か所の銀行支店・本部ビル・寮・厚生施設の食堂から排出される廃食用油(年間約22,000リットル)を株式会社レボインターナショナルに提供します。この廃食用油はSAF(持続可能な航空燃料)として再資源化。主に航空業界のカーボンニュートラル実現に貢献します。





代表取締役 CEO 越川哲也 氏

"製造"と"収集"の両面で、 SAFの普及をリードしたい

弊社は1999年の設立以来、一貫して廃食用油由来バイオディーゼル燃料の製造・販売を手がけてきた会社です。実はその研究開発を進めるなかで、既に2000年代には、廃食用油からジェット燃料を製造するためのコア技術を確立しています。しかしながら、当時は航空業界からの需要がほとんど見込めなかったため、事業化は考えていませんでした。そんな状況が一変したのは、ここ数年のこと。カーボンニュートラルの実現に向けて、国産SAFの重要性が叫ばれるようになったのです。それならば私たちが培ってきた製造技術と廃食用油収集のノウハウを、ぜひ役立ててほしい。SAF市場への参入を決めたのは、そんな思いがあったからです。

グリーンローンを活用し、 新たな製造プラントを整備中!

もちろん国産SAFの普及という目標は、弊社だけで達成できるものではありません。そこで2022年には、日揮ホールディングス株式会社、コスモ石油株式会社とともに、合同会社SAFFAIRE SKY ENERGYを設立。一丸となって国産SAFのサプライチェーン構築を目指しています。またSAFの普及のためには、生産能力の向上も必要不可欠です。弊社では、三菱UFJ銀行からグリーンローンとして調達した資金をもとに、愛知県田原市で新たな製造プラントの整備を進めています。

KEYWORD

SAF

航空業界で大注目の「SAF」とは?

SAF(サフ)は、「Sustainable Aviation Fuel(持続可能な航空燃料)」の略称。従来のジェット燃料が原油から精製されるのに対し、SAFは廃食用油やサトウキビなどのバイオマス資源か、廃プラスチックや都市ゴミなどの廃棄物が原料となる。ジェット燃料と比較して、約60~80%のCO2削減効果があるとされている。

MUFGとの取引開始は大きな一歩 オールジャパンでSAFの国産化を

SAFの原料となる廃食用油の調達も大きな課題です。現在、一部の飲食チェーンと廃食用油の取引を行っていますが、安定的に原料を確保するためには、より多くの企業の協力が欠かせません。そういった観点からも、この度、三菱UFJ銀行と廃食用油の取引を開始できたことには、大きな意味があると感じています。「あの三菱UFJ銀行がやっているのなら」と、興味を持ってくれる企業もいらっしゃるはずです。私たちはこれからもバイオ燃料のパイオニアとして、循環型社会の推進を目指し、環境問題の解決に取り組んでまいります。そんな姿勢に共感し、ともに未来をつくっていける仲間がもっともっと増えてほしい。そう願ってやみません。





震災からの復興にも バイオディーゼル燃料が貢献

今でこそ化学の世界に身を置いていますが、私自身は大学では土木工学を学びました。卒業後、一度は建設業界に進んだのですが「レーシングドライバーになりたい」という夢を叶えるために、京都のレーシングチームに転職。そこで出会ったのが、廃食用油由来のバイオディーゼル燃料「C-FUEL」の生みの親である京都大学の故・清水剛先生です。このとき清水先生から直々に「C-FUEL」の製造方法を教えていただけたことは、本当に幸運でした。それを最初に痛感したのは、阪神・淡路大震災のときです。私は重機のオペレーターとして、何度となくボランティア活動に参加しました。被災地は慢性的に軽油が不足している状況でしたが、「C-FUEL」のおかげで滞りなく作業を進めることができた。重機が不具合を起こすようなこともありませんでした。「C-FUEL」の実力を、身を以て実証することになったのです。

「あらゆる廃棄物が、工夫次第で資源になり得るんです」

"地産地消"こそが バイオ燃料のあるべき姿

震災の傷もまだ生々しい1996年、COP3の開催を翌年に控えた京都市では、ゴミ収集車などのバイオディーゼル燃料化事業が計画されていました。そこで燃料を安定供給するとともに、実用化に向けたさまざまな課題を解決するために設立されたのが株式会社レボインターナショナルです。私が製造供給したC-FUELは1997年に公的に公道を走行可能な国内初のバイオディーゼル燃料として認定され、現在まで国内トップシェアを守り続けています。その品質が高く評価され、欧州各国にも輸出されているのですが、これには少し複雑な思いがあります。SAFの国産化にもつながる話ですが、いくらバイオ燃料とはいえ、それ自体の輸送プロセスでCO2を排出してしまっては元も子もないからです。廃食用油という"資源"が、国外に流出してしまうことも問題でしょう。本来、バイオ燃料は"地産地消"がベストなのです。



片山企画・大阪産業大学と大阪TOYOTAとタッグを組んで挑んだ2007年の「ダカールラリー」では、バイオ燃料100%でレースを完走。

サステナブルな資源を もっと上手に活用するために

バイオ燃料化技術の開発と製造だけではなく、廃食用油の収集から自社で手がけていることも、私たちの強みです。その点、料亭などが多い京都という街で事業をはじめられたことは幸いでした。地元の飲食店のみなさまには、今も助けられています。一方で、近年は収集ネットワークの全国化にも力を注いできました。今後は、製造プラントもあわせて全国各地に展開することで、エネルギーの"地産地消"をさらに推し進めたいですね。またいずれ廃食用油だけでは需要を賄えなくなることが確実なので、そのときに備えて「ジャトロファ」という植物を原料とした新たなバイオ燃料の開発にも取り組んでいます。ジャトロファだけではありません。地球上には、まだまだ見落とされているサステナブルな資源がたくさんあるはずです。それらを上手に活用するための技術開発と仕組みづくりも、私たちのこれからの重要な使命だと考えています。



バイオディーゼル燃料の国内最大の燃料生産能力を誇る京都工場。2024年中には新たにSAFも製造する愛知工場も稼働予定。



見通しに関する注意事項

本レポートには、株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループおよびそのグループ会社に関連する予想、見通し、目標、計画等の将来に関する記述が含まれています。これらは、当社が現在入手している情報に基づく、本レポートの作成時点における予測等を基礎として記載されています。また、これらの記述のためには、一定の前提(仮定)を使用しています。これらの記述または前提(仮定)は主観的なものであり、将来において不正確であることが判明したり、将来実現しない可能性があります。なお、本レポートにおける将来情報に関する記述は上記のとおり本レポートの作成時点のものであり、当社は、それらの情報を最新のものに随時更新するという義務も方針も有していません。また、本レポートに記載されている当グループ以外の企業等に関わる情報は、公開情報等から引用したものであり、かかる情報の正確性・適切性等について当社は何らの検証も行っておらず、また、これを保証するものではありません。